

編集後記 A POSTSCRIPT by the Editor

コロナ禍はいつまで続く

コロナ感染の収束が見えない。お天気様のように自然現象とみるべきなのだろう。ビジネスでは、コロナ禍を前提に行動計画を組み立てるべきなのだろう。「天に唾を吐いても・・・」と思える毎日である。

そう思っても、個人の対応だけでは限界もある。政府が取組んだ「GoTo トラベル」は、「GoTo トラブル」と見えてならない。余りにもコロナの感染力を甘く見た。コロナ感染を恐れて我慢していた国民に、補助金付きで地方に移動させ、コロナを拡散した。GoTo トラベルを総括（反省）しないで、移動制限はないだろう。飲食店だけを悪者にしても、矛盾だらけである。なぜ原因を断たないのか。

原因を断つとは、コロナ感染者を検査で見つけ出し、2次感染を防ぐ行動である。後手にまわった感染対策しかしていない。検査希望者には、検査を無償とする。飲食店従業員は、毎日でも毎週でも検査をする。レピータが多いのだから。お客も検査する。

医療先進国であった日本の国産コロナワクチン開発では、なぜ後進国になってしまったのか不思議でならない。コロナが騒がれて長くなるが、官民一体での開発をしてきたとは思えない。コロナ対応で先進国と後進国という区分をすると、日本が後進国のグループの中にある。結果を見ての「無策」との批判は多いが、コロナ対策に関する「提言」があるわけではない。右からも左からも提言がないのは、民主国家日本の実力である。

デジタルイノベーションを実現する工学的手法の研究

巻頭言は『デジタルイノベーションをデザインする』と題し、北陸先端科学技術大学院大学知識科学系教授東京サテライト長の内平直志からの寄稿である。内平は「現実空間のあらゆる情報がデジタル化され、ネットワークを介してサイバー空間で蓄積・分析され、その結果を現実空間で活用するサイバーフィジカルシステムが様々な産業や社会に広がっている」と提言する。さらに「100年に一度の大変革は、すべての企業や行政などの組織にとって大きなチャンスであるとともに対応できなければ大きなリスクでもある。デジタルトランスフォーメーション(DX)は、チャンスを活かしリスクを避けるために避けられない企業や組織の変革である」とつづく。本誌の特集「With コロナ時代のデジタル社会変革」について言及し、「社会の様々なステークホルダ間の対話に基づく変革のデザインが必要であろう。今後、開発を工学的に扱う日本開発工学会のコミュニティで、ビジネスや社会も巻き込む「開発」といえるデジタルイノベーションを実現するための「工学的手法」の研究がますます加速することを期待する」と当学会の目指すべき目標を示唆してくれた。

本誌の特集は『With コロナ時代のデジタル社会変革の行方』と題してZoomを使って取り組んだシンポジウムを取り上げた。講師の柴崎辰彦は『デジタル変革時代に実践すべきこと』と題し、小山武志からは『日本のDXやITを推進するための提言』と題した論文を掲載した。

三森八重子は『イスラエルのイノベーション・エコシステムの分析』と題する査読論文を投稿し、受理された。三森は、小さな技術大国であるイスラエルを取り囲む各種の条件を吟味し、イスラエルの「イノベーション・エコシステム」を分析し、日本でも活用できる要素を提案している。本論文、昨年12月27日に査読論文を受付し、再投稿、再々との投稿を繰り返し、3月4日には受理となっている。投稿者、査読者の努力もあり、2か月余の短期間で採録になった。変化の激しい今日にあっては、理想的な短期間での論文審査を実現できた。

連載は『サービスイノベーション・ニューパラダイム：第4回(中村)』と『エンジニアリング・ブランド概論：第8回(小平)』の2シリーズに加え、新たに『中小企業のためのグローバル経営戦略論(山中)』と『中小企業経営者に対するデジタル教育(小平)』の2シリーズの取り組みが始まった。

新たな研究分野に取り組むコラムの掲載

ミニコラムに、新たに浅野昌宏が「若者の大陸・アフリカの今」と題し、連載に取り組む。浅野は「アフリカ諸国は、独立からほぼ60年経過し、漸くダイナミックに変わり始めた。「若者の大陸・アフリカの今」と題し、成長を続けるアフリカの今に、光を当ててみたい」との視点でコラムに取り組んでくれることになった。

7つの多彩なミニコラムが掲載されている。多様な人材による実学情報を紹介することができている。ミニコラムを通して、既成の概念にとらわれない新しい学問領域の新鮮な情報を会員に提供できている。

堀内議司男が『茶道の世界に学ぶ②』、余田幸雄が『技術系中小企業の中堅企業への成長と事業深化に必要な課題を探る③』、土山真由美が『組織間ゲートキーパー④』、木下智雄が『技術経営：保険を活用したリスクマネジメント⑤』、森下あや子が『IOTイノベーション⑧』、倉田洋が『イノベーションと企業財務⑨』と題するコラムを掲載している。

技術経営分野での工学的手法お研究に取り組む

DX研究が本格的になってきた。内平のいう「工学的手法」の研究をますます加速させたい。会員とともに日本の変革の実学研究の先頭を走りたい。大変革の時代の中にある。当学会は、変革の波に乗り研究会活動を活性化させ、デジタル関連の技術経営研究に取り組む。

理事・編集委員長 小平 和一朗 (K.Kodaira)